

瀬戸内市民図書館 セとうち発見の道企画展

「豊原北島神社の昔」

展示期間:令和 8 年(2026)10 月 1 日(木)~令和 9 年(2027)1 月 26 日(火)

展示担当:瀬戸内市 成長戦略部 観光文化戦略課

◆ 豊原北島神社

豊原北島神社は舒明天皇 6 年(634)に創立したと伝えられています。その後、永正 7 年(1510)に大風の被害によって廃れてしまい、翌年に備前国・備中国・美作国の助力によって再建。本殿はその後寛文 7 年(1667)、正徳 2 年(1712)の修理歴が記録されています。現在の本殿は大正 8 年(1919)に再建されました。

江戸時代中期の池田光政の時代に寺院整理が行われた際、神仏分離で餘慶寺と豊原北島神社も分離され、本乗院の良庸(りょうよう)が還俗して神社の神職となり、業合斎宮(なりあいさいぐう)と改名しました。

◆ 豊原の由来

豊原北島神社の「社記」には、次のように書いてあります。

「当大社、此御山に遷らせ給ひし時、石の上に藁を敷き御鎮座なさしめ奉るによりて、此所をトキワラの荘と唱えし由。今の豊原の荘なり、御鎮座石は社内の庭内にありて奉祀せり」

舒明天皇 6 年(634)に宇佐八幡宮から勧請された際、山上の大石の上に藁をとき広げて神座にしたという逸話が藁をとく、トキワラから転じて豊原という地名の由来になったと言われています。

◆ 神社の屋根について

①屋根の妻と平



屋根には、建物の形を表す「妻(つま)」と「平(ひら)」という部分があります。

妻は、屋根を横から見たときに見える、三角形の面のこと、平は、妻と反対側の、屋根が斜めに広がっている大きな面のことです。

妻＝屋根の三角形の側

平＝屋根の大きく広がった側

建物の入り口が妻にあるものは「妻入り」、平にあるものを「平入り」といいます。「入り」は「どちら側から建物に入るか」という意味です。

②色々な屋根の種類

寄棟造



四注造(しちゅうづくり)ともいい、一つの大棟と四つの隅棟とから構成される屋根型。

宝形造



方形造(ほうぎょうづくり)とも書き、平面が方形の屋根で、方錐形をなす屋根型です。四つの隅棟が方錐の頂点に集まり、頂点上には露盤が置かれます。

入母屋造



切妻造(きりづまづくり)の四方に庇を付けて一つに統合したような形式の屋根。大棟の飾りでは、鴟尾・鬼板・獅子口などが用いられます。

切妻造



大棟から両側に二つの斜面を葺下した屋根型。一般に大棟に平行方向を平といい、直角な方向を妻といいます。

片流れ屋根



大棟から両側に二つの斜面を葺下した屋根型。



切妻造の一形態

③千木(ちぎ)と鯉木(かつおぎ)

神社の屋根の上には、ほかの建物ではあまり見られない、特徴的な飾り「千木」と「鯉木」があります。

千木(ちぎ)・・・屋根のてっぺんにある、交差するように突き出した2本の木。先端の削り方には、「外削ぎ」と、「内削ぎ」があります。神社によって削ぎ方が異なり、千木を見ることで神社の特徴を知る手がかりにもなります。

すべての神社に当てはまるわけではありませんが、外削ぎは男神、内削ぎは女神を祀るものが多いと言われています。

鯉木(かつおぎ)・・・千木の下に並んでいる丸太のような木です。屋根の上に何本か並べて置かれていて、屋根を押さえる役割を持っていたものが、神社では装飾としても使われるようになりました。こちらも千木と同じく、神社によって太さや本数が異なります。

